
東方單車迷走

地衣 卑人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方單車迷走

【NZコード】

N9853Y

【作者名】

地衣 卑人

【あらすじ】

よく見る幻想入りS.S。

何故かバイクとなり、過去へタイムスリップした主人公による東方世界探索紀。

一 人と鉄

本文は、上海アリス幻樂團様によります同人シユーティングゲーム、東方projectの一次創作SSとなつております。
未熟、遅筆ではありますものの、せめて暇つぶしにでもなれば幸いで御座います。

また、本文は所謂『幻想入り』SSとなつております、東方project原作には登場しない、オリジナルのキャラクターが主人公で御座います。
その点のみ、ご了承をば。

小さな神社。

山奥の、本当に小さな神社へと続く石段の下。道路から外れ、少し開けたその場所に、一台のバイクと、その上に寝そべる男性が一人。

俺である。

「ああ・・・ぬぐい・・・」

多分、傍から見れば相当間の抜けた顔をしていると思つ。人は来
そつに無いから、気にする必要も無いのだが。

人一人来ない神社。

そんな神社に何故来たのかと言えば、なんて事はない、只の趣味
である。

バイクに乗つての神社廻り。

「ああ、気持ちええ・・・」

季節は冬。風は、今日も冷たい。が。
バイクに乗つたあの仄かな疲れに、暖かな日光。そして、エン
ジンの余熱。冷えた身体に染み入るように伝つ温もり。

気持ちいい。車のエンジンルームに潜りこむ猫の気持ちが分かる
気がする。そのままエンジンを駆けられて南無、なんて話もよく聞
くが、被害者たる猫達の心境はきっと今の俺のような状態だったに
違いない。

危機感一つ憶えず、重くなる瞼を跳ね除けようともせず。睡魔に
身を委ね、気付いた頃にはもう手遅れ。

今思えば、俺が置かれている状況は、正に猫達のそれであった。

「・・・ちなみに

日を冷ますと、辺りはもう暗かつた。ビーツや、黙つてしまつて
いたらしい。

「やべ、帰らないと・・・」

何せ山奥。灯りの無い道の走行はかなり恐い。俺はギアが一コ一
トルに入っている事を確認し、エンジンを回し始めた。
なんだろう、何となく違和感を感じるのは。変な体勢で寝たから
だろうか。

兎角、早く帰らないと。

周りを確認し、ギアをローに落とす。クラッチを繋げないままア
クセルを数回、勢いよく掛けた。

夜の山にエンジン音が響き渡る。

それが、いけなかつた。

突然かけられた怒声に、つい間抜けな悲鳴を上げてしまう。チキ
ンだから仕方ない。あ、エインストした。

「何時の間に入り込んだのか・・・」

「な、な、あ?どちら様で?」

「天狗よ。そして此処は私達の山。侵入者さん」

天狗?天狗と言つと、あの天狗だろうか。

「ほ、本物?」

天狗。日本では馴染み深い妖怪の一つ。山の神であるとも、修験

者達の成れの果てとも言われる、力ある妖怪。

その正体は漂流し、日本に流れ着いた外国人であるとも言われるが、かけられた言葉は流暢な日本語、それも空から聞こえて来たとなると、信じる他なさそうだ。

「貴方は？」

「はい？」

「種族」

「見て分かる気がしますけど・・・」

声の主は姿を表さない。それが、逆に不気味で仕方ない。声自体は上から聞こえるのだが。

「・・・狼？」

「人間です」

そんな馬鹿な、と言つ声が聞こえたかと思うと、目の前に何かが着地する。

「私の知る人間は、貴方ほどおかしな姿はして無いわ」

降りたつたのは少女。想像していた姿とは大分食い違つたが、女の天狗だつているのだろう。

「鼻、長く無いのな」

「鳥天狗だからね。もつと上役がお望みだつた？」

「滅相もございません、そんな畏れ多いこと・・・」

彼女は俺の周りを回りながら、俺の姿を注意深く観察している。バイクが珍しいのか、興味深気に確かにバイクの形は狼のそれに

似ていないこともない。

「・・・生き物、つて感じがしないわね。どこも硬そうだし・・・

「甲殻類?」

「哺乳類」

「それは無い」

無くない。

未だ人間扱いされるのは悲しいが、どうやら敵意は無いようだ。

寧ろ、好奇心か。

これは、何とか上手く説得なり謝罪なりすれば生きて帰れるかも
しない。

さて、どう出るべきか。

天狗は未だに、バイクに興味深々な様子で、何やら一人で呟いて
いる。

「うーん、生き物かしら。でも、現に話してるし、妖氣も感じるし・
・・」

遂に生き物であるかも疑われ始めたか・・・つて、妖氣?

「妖氣?俺から?」

「ええ、妖氣。あ、もしかして憑喪神?」

「人間!」

おかしい。妖氣は、妖怪が発するものじゃないのか?

そして、天狗には俺が人間には見えないと呟つし、身体には違和
感もある。

てか、実を言うと、今俺はバイクに乗つている感覚が無い。けど、
確かに俺はバイクを操作している。まずい、混乱してきた。

「・・・なあ、俺つて何に見えます?」

「Hビに似てる気がしてきたわ」

「・・・鏡とか、持つてません?」

「あるけど・・・はい」

天狗が、俺に鏡を向ける。ライトが反射して、バイクが明るく映し出された。

バイクだけ。

乗っている筈の俺の姿は、何処にも無い。

「・・・なあ、鏡に映つてない部位とか無いよな。鏡に映つてる俺の姿と、天狗さんから見える俺の姿、何処も違いは無いよな・・・?」

「質問の意味がよく分からぬいけど・・・何処も、違いはないわ」「で、ですよねー」

なんてこつた、と手を投げ出して叫んでしまいたいが、それすら出来ない。

この違和感の原因にして、俺が人間に見えない理由が分かつたのだ。

「俺、バイクになつとるがな・・・」

かくして、俺のバイク人生が幕を開けたのであった。

夢の中で動物や、赤の他人になるといった話はよくある事である。空想上の生き物が現れるというのも、ごく普通、ありふれた夢。しかし、夢の中で、それが夢だと自覚出来ることは少ない。夢だと自覚できた夢を明晰夢といい、その状態ならば、夢を自由にコントロールする事も出来るのである。つまり、夢の中なら何でも出来るのだ。

「トライансフオーム！」
「・・・何をしてるの」
「・・・どうやら夢じやなこようだ」
「はあ・・・」

夢ならば、自分の好きな様に操れるのである。しかし、今の俺の状況は操るどころか、天狗に白い田で見られる始末。少し恥ずかしい。

「やつぱ、夢じやないのかあ・・・」

天狗に案内された池で、もう一度、よくよくと自分の姿を確認する。

やはり、バイクである。ちなみに、赤いアメリカン。中型。俺の愛車、そのままの姿である。これは、俺がバイクになつたというより、俺がバイクに取り込まれたといったところなのかな。

身体にあつた違和感は、自分がバイクになつてしまつたことに気が付いてからはとんと無くなつた。そもそも、自分はバイクであつたかのように。

「とりあえず、上には無害で、変化したての迷い妖怪つて報告しておいたから。監視はするけど」

「ありがとうございます……」

「ほらほら、落ち込まないの。妖怪もいいものよ？人間よりずっと」

それは同意する。もし、妖怪が実在するならば、俺も妖怪になつて気儘な人外ライフを送りたいと常々思つていた。が。

「でも、この姿つて……手の一本もないなんて……」

一番の問題は、そう、手である。人間が人間たる象徴。物を持つことさえ出来ないと言うのは、不便そうで仕方が無い。バイクなんで、物を掴む必要なんてないかも知れないが。

「まあ、慣れるわよ。そのうち」

「うう……」

「それより、これからどうするのよ。流石に、この山には居られないわよ？」

そう言えば、この天狗と話していくてもう一つ分かったことがある。時代が違うのである。具体的に言うと、千何百年かに渡るタイムスリップ。歴史はとんと黙りだが、それでも少ない知識を騒動員しながら今が、元いた時代から千数百年程前であるということが分かつたのであった。

そんな時代にバイクで。いいのだろうか。いいか。

「とりあえず、朝になつたら出て行きますので……それまでは此処において下さるとありがたいです」

「それは構わないけど……暇だしね。どうせだし、家に来ない？」

寒いでしょ？」「

「よろしいんで？」「

「いいわよ、一晩ぐら。それより、ね・・・」「

少し恥ずかしそうに、俺を見る。俺、ヒーリングシート部分を、か。

何だろうか。そんなにまじまじと見つめられると、いちが恥ずかしくなるのだが。

「貴方、乗り物だつて言つてたわね」

ああ、話が見えた。それくらいなら、お安い御用である。続くであろう言葉を先取りし、彼女に一つ提案する。

「乗つてみます？」

その言葉に、彼女の顔がぱっと輝く。やつぱり、乗りたかったのか。

「いいの？」「

「ええ、早くこの身体にも慣れたいですし、誰かを乗せて走る練習にもなりますし」

「なら、遠慮なく

第一、彼女は恩人である。天狗に目をつけられようなら、今頃スクラップになつていてもおかしくは無かつた。それに加え、今晚家に停めてくれるなんて。天使だろうか。天狗か。

「馬と同じ様に跨つて、横の出つ張りに足をかけて下さい」

「い、こう？」「

天狗様が俺のシートの上に乗る。あ、柔らけ……

「……変なこと考えてない?」

「いや、無生物ですし」

「それもそうね」

悲しきかな、感覚こそあるもののそういう邪念は本当に湧かない。バイクだからか。精神的に老けた気がする。

「あ、一応ヘルメット被つて下さいね」

「へるめつと?」

「その、後ろに掛かってる丸いのです。安全のための兜……みたいなものですので」

何故か、俺のシーシーバー……バイクの背もたれに引っかかっていたヘルメット。赤いフルフェイス。

「ん、分かった……ちょっと息苦しいかな」「慣れますよ、すぐに。さて……」

運転は、俺が勝手に動くので問題ない。

唯、彼女がアクセルを回したり、ブレーキを掛けたりすると非常に危ないので、そこだけは注意しておぐ。

「次は、前にある一本の棒の先……握りやすくなってる部分を握つてください。でも、絶対に回しちゃ駄目ですよ。あくまで、軽く。それは、舵みたいなものなので」

「ん」

「股に力を込めて。身体を支えるのは、基本的に足、太ももの部分

で挟む力で

「こう?」

「やうやう、振り落とされないよつこ・・・では、行きますよ」

エンジンを掛け、ギアをローに。クラッチはまだ、繋げない。

「道案内、頼みますね」

「まずは、右。とりあえず、そのまま真っ直ぐ」

了解、と言つ言葉の代わりにアクセルを一度勢い良く掛け、俺は彼女を乗せて夜の山路へと駆け出した。

「いいじゃない、これ!速い速い!気持ち良い!」

彼女が楽しそうに言つ。天狗の飛行速度は途轍も無く速いと聞いていたが、楽しんでもらえているようだ。

それに、俺自身も楽しくてならない。人を乗せるのが、こんなにも楽しいなんて。

「あの別れ道、右!」

「了解!」

少しばかり危なつかしく、右の道へハンドルを切る。舗装されて無い道でもこれだけ走れるのは、バイクと一体化したからか。とても動きやすい。

「ここから、ずっと真っ直ぐ…まだ速くなる?」

「速くはなりますけど、ちと怖いです…」

「分かった!頑張って!」

はて、頑張ってとは一体、い!?

「ちょ、天狗様!?」

「舵は任せた!」

突然上がったスピード。エンジンが唸りを上げ、ギアを擧げると騒ぎ始める。

彼女の手には、強く握られたハンドル。アクセルを掛けたのだ。どうやら、アクセルと速度の関係に気付いたらしい。

「あ、危ないです!」

「大丈夫!速く!速く!」

しまった、スピード狂だったか。

どうやら、止めても聞く気はない様だ。

「ああ、もう。怪我しても知りませんからね!」

ギアを上げる。嫌な音を立てていたエンジンが一旦静かになり、またその鼓動を早めていく。

過ぎ去る景色に楽しむ暇も無く、置き去りにした景色を思つ余裕さえ無く。

夜の山路を轟々と駆け抜ける。

「あと、どのくらいですか!」

「もうすぐ！・・・見えた！」

「天狗さん！右手、戻して！」

強く握られていたアクセルが戻され、スピードが落ち始める。

「止まれる！？」

「なんとか！」

前輪後輪のブレーキを、徐々に、それでも速やかにかける。クラッチは、繋げたまま。

タイヤが地面を抉り、砂埃が車体にまとわり付く。ああ、風呂入りたい・・・違う、洗車したい。

速度が落ちる。落ちる。車体が若干前に進のめり、天狗が倒れまいと足に力を込め、タンクごしにその感覚が伝わる。やつぱり柔っこい。

ズザザ、と砂を撒き散らしながら、地面に車輪の跡を引き、俺は一軒の家の前で止まつた。やつて良かつた急制動。

「到着、ですかね？」

「ええ・・・ああ、楽しかつた」

ヘルメットを俺に掛け、彼女が俺から降りる。

「天狗様なら、飛べば俺よか速いでしょう」

「飛ぶのと走るのは全然違うわよ。いいわね、あの疾走感。家に置いておきたいくらい」

俺に背を向け、引き戸を開く。

「あと、天狗様なんて呼ばないでよ、気恥ずかしいし」

「でも、名前・・・」

「あ、教えてなかつたつけ」

「私の名前は射命丸文。清く正しい鴉天狗よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9853y/>

東方単車迷走

2011年11月29日20時49分発行